

野生の命が教えるもの。

『蜻蛉日記』という古典文学がある。藤原の道綱の母なる女性が、954年(天曆8年)から974年(天延2年)までの出来事を記したもので、題名は日記のなかの文章「なほものはかなきを思へば、あるかなきかの心ちする**かげろふの日記**といふべし」より名づけられたものだという。その後1000年(長保2年)から1012年(寛弘年間)頃にかけて、記された紫式部による『源氏物語』では、この蜻蛉日記の影響を強く受けているともいわれ、その52帖には「蜻蛉の巻」なるものもある。

高校生の頃だったろうか、確か鴨長明の『方丈記』の一文に「**朝に死に夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。**」というものがあることを教えられた。「朝に死に夕べに生まるるならひ」はまた、蜻蛉の形容詞でもあると学んだ記憶がある。

しかし以来我々は蜻蛉の一生は一日であり、蟬の一生は1週間であるという意識が根深く刷り込まれてしまったようにも思う。そしてこうした表現はNHKのテレビ番組などを見ている、しばしば持ち込まれている。小生はこの**文学的表現の世界**と、**科学的事実の世界**とを、しっかりと分離して教育すべきであると思えるようになってきた。

★ ★ ★ ★ ★

小生は『**花の縁**』なる、かなり長編のホームページを作成した。この間かれこれ30年に及び、植物を中心とした世界を写真に収め、そこに集う昆虫や動物たちを出来るだけ冷静に見つめてきた。そして気づいたことは、すべての生物の習性や構造は、子孫を繁殖させるためのものであると悟った次第である。またそういう習性があったからこそ、この地球上に生き残ってきたという結論を得るに到った。植物は自然への適応力はかなり強い。苗木などは寒さにあうと枝葉はすべて枯れて、翌年は根際から新たな枝葉が芽吹く。そしてこの枝葉は以前よりも明らかに寒さに強くなっている。しかしラクダが乾燥地で生き抜くために次第に進化して、そのコブの中に水分をより多く蓄えるようになったという見解は、いささか賛同しがたい。それはより多く蓄えることができる遺伝子を持ったラクダだけが砂漠に生き残り、この積み重ねによって、さらに厳しい乾燥にも生き残って来た、と考えるほうが自然だと思う。

★ ★ ★ ★ ★

蜻蛉の話に戻ってみよう。蜻蛉の一生は実は一日ではない。種類にもよるが半年から1年で、他の昆虫類と比べて必ずしも短いものではない。蟬にしてもその一生は1週間ではない。地下での生活が何年もあり、実は小生が育った浦和では、子供の頃見たこともなかった蟬であるミンミンゼミが、現在では軽井沢で生存している。その理由は簡単である。地下の温度というものは、地表近くでは軽井沢などでも零下15度ぐらいになることもあるが、地下数メートルでは零下に下がることはない。従って地下深くに潜行すれば、セミの幼虫は越冬できる。

では何故セミになると1週間で生涯を閉じるのだろうか。我々はいつセミとその幼虫時代を別個のものとして捉えがちであるが、これが間違いの元である。すべての昆虫類には幼虫時代があり、最後のステージで羽を持ち大空を飛ぶことが出来るようになる。何故だろうか。近親結婚を避けるという理由からである。椿や桜を植樹としているアメリカシロヒトリの毛虫を見れば分かるように、親は産卵するに当って、いちいち別個の場所を選んで少しずつ産卵するような手間をかける昆虫は少ない。食樹を見つけるとそこにまとめて産卵するのである。しかしこうして育ててゆくと、もし羽を持たなかったら、すべて近親結婚となり種を保つことはできない。このために最後の段階で羽を持ち、他の親から生まれた個体と交尾することにより、種を保存する仕組みになっているわけである。クマや、ライオンなどの高等動物においても、子別れの儀式がある。これも同様に、近親結婚を防ぐために、わが子を他の群れに行くように仕向けるために行われるのである。植物に果実が出来るとき、モモやリンゴなど殆どのものが、鳥に食べられてしまう。これも鳥に食べられることにより、親から出来るだけ離れたところで発芽できる仕組みになっているからである。エノコログサ(花の縁 03-05-12)のように動物の毛について、四方八方遠くへ運ばれるもの、タンポポやモミジのように風によって運ばれる仕組みになっているもの、スイレンやウォーターヒヤシンスのように、水に運ばれるよう企図されたものなど、生息環境に応じて実に様々である。

★ ★ ★ ★ ★

そして小生が申し上げたいことは、すべての習性が生殖と密接に絡んでいるという点である。例えば夏、水溜りに美しい蝶が水を吸いにやってくる。しかしこれをよくよく観察してみると、オスばかりでメスはいない。何故だろう。実はオスの精子は低温では強い生命力を持つものの、高温には弱い。そこでオスは水を体内に取り込んで体温を冷やして、生殖能力の維持に努めるというわけである。したがって飲み込んだ水は、オシリからポタポタと排出している。つまり水を飲んで喉を潤すという行為とは異なったことを行っているのである。高等動物では精子の低温保存に関しては、ほとんどがいわば空冷式で、暑いときには体温がそのまま伝わらないように、出来るだけ下に垂れ下がるように出来ている。これに対して昆虫などでは、この水冷式が多いというわけである。

★ ★ ★ ★ ★

そして我々が本で学んだ知識の中には、現実と異なったものが少なくない。例えばインドなどで笛の音につれて首を振るコブラ。実はコブラは聴覚が退化している。従って笛の音は聞こえない。ここで首を動かすのは笛吹きとの距離を図って、いつでも飛びかかる準備をしているのである。そして、闘牛の牛、牛は実は全色盲である。このため赤い布に興奮して襲いかかるというのはショウビジネスの言い分であって、科学的根拠によるものではない。つい人間はすべての五感が健全であるために、

人間以外の高等動物も同じだと考えがちだが、そこがそもそもの誤解の始まりである。これを自然教育でしっかりと是正していただきたいのである

すべての動物はエサを食べて生存し、次世代に命をつなぐために生きているといっても過言ではない。従って一つはエサをとり安いための仕組みを持っており、次に生殖しやすいための仕組みを持っている。人間はきわめて優れた目を持っているために、生殖行為は視力を通して行われることが多い。ビニ本が売れるのも実はこのためである。しかし人間以外の動物は視力よりも嗅覚であり、また聴覚である。繁殖期の猫の鳴き声は、明らかにメスを求めるもので、仔猫が親を求めるときも同じような声で鳴く。そして仔猫がやたらと鳴くのも、ペンギンの仔が鳴くのも、親子相互で音波の形状を記憶して、親子の関係をきちっと確立するためである。飼い主が「タマ！タマ！」と仔猫を呼ぶとついて来るのは、エサを与えてくれる人間を親だと認識しているため、犬が大きくなって人間になついているのは、犬は群れを作る動物で、飼い主を群れのリーダーと思っているからなのである。

★ ★ ★ ★ ★

自然を一つの法則で理解すると、その法則があちこちで応用できることも少なくない。スズメバチが黒い服を着た人間を襲うのは、クマに蜜を舐められているから、その記憶が刷り込まれている。などといわれることも多いが、小生はこの説には疑問を持っている。そもそもスズメバチが、色の区別を出来るのだろうか。その証明がなければ、この理論は正解とは言えない。花に蝶が集まるのも花が美しいからだという論理も疑わしい、チョウチョは美しい花と、醜い花を見分ける能力があるといえるだろうか。これも花の香りだと小生は考えているからである。

★ ★ ★ ★ ★

現在の自然科学の授業が、どう行われているのか、小生は残念ながらよく知らない。しかし肝心なことはまず人間とその他の動物とでは、全く異なった五感を有していること、そしてその五感がこの生存競争の激しい地球上で、種を守ることに役立ってきたから生存していること。そしてすべての生き物は、子供を生んでその子供を一生懸命に育てて、次の世代を確実に残して後に、命を終えてゆくことを教えて欲しい。そして今この地球上に生を受けた者は、必ず自分のコピーをこの地球上に残さなければならないことを…。

★ ★ ★ ★ ★

人間の場合は子供を生んで育てることは動物ほど簡単ではない。しかし人間には動物とは異なった社会性があり、知恵がある。子供は個人だけの所有物ではない。社会全体の宝である。託児所や保育施設も大事な施設ではあるが、どうしても子供を育てる余力がない人の子供でも、育てることの出来る施設を充実させることが求められているように思う。まだ生まれて間もない子供が、親に命を奪われている事実はなんとも悲しい。これは動物界では考えられないことなのである。